ヒューマノイド(3)

伊坂 幸太郎

次の表は、教科書本文の内容をまとめたものである。

場面1	場面2	場面3	場面4
三十歳の六月十日 職場の会議室で「人間は、恥ずかしいと思うようにできていますから。」と口にした「僕」は、十数年前にその言葉を同級生のタクジから聞いたことや、三十歳の六月十日に会おうというタクジの言葉を思い出した。	**回想　タクジとのたわいもない話** 「僕」はタクジと特別仲がよいというほどではなかったが、教室でたわいもない話をするのは好きだった。タクジはヒューマノイドロボットを作るなら、という話をよくしていた。	**回想　タクジと話すようになったきっかけ** 登校中、同級生と間違って上級生に声をかけ、恥をかいた「僕」にタクジは、人間の「恥ずかしくなる」機能についての話をした。タクジは、「もし僕がヒューマノイドロボットを作るなら、人間の恥ずかしい気持ちを理解できるようにする。」と言った。	**会議中、中学時代のことに思いをはせる** 「僕」は恥をかく場面でも動揺しないタクジに、憧れに近い思いを抱いていたのかもしれないと考える。「僕」の視線の先に美術の時間の場面が浮かんだ。

場面5	場面6	場面7
回想　タクジとの約束 美術の時間、転倒したタクジは絵の具をひっくり返し、クラス中に迷惑をかけてしまった。 その日の放課後、タクジは、明日の六月十日、駅前の広場で開催されるロボットのイベントに行こうと「僕」を誘ってきた。冷たく断る「僕」にタクジは、「二十歳になったときに。」「二十歳がだめなら、じゃあ、三十歳になったときにしようか。」と声をかけた。 週明け、タクジは引っ越していた。	**会議後** 「僕」はタクジが引っ越した後、連絡を取らないままになっていた。 帰りの駅のホームで絵の具がはじける映像が目に入った「僕」は、自宅とは逆方向に行く列車に乗り込んだ。	**ロボットの日** 駅前広場だった場所にある施設では、ロボットの日のイベントが行われていた。ステージ上でロボットが転倒し、それに対する開発者の言葉に「僕」は引っ掛かりを覚える。 「久しぶり！」「元気だった？」とステージ上から「僕」に大声で呼びかけたのはタクジだった。皆の視線が「僕」に集まる中、「僕」に向かって手を振るヒューマノイドロボットは恥ずかしさをわかっているようには見えなかった。

確認テスト

(1) 教科書本文を読んで、問いに答えなさい。

次の各文の出来事を、最も過去のものから順に並べかえなさい。

ア 「僕」は職場の会議室で、今日が三十歳の六月十日だということに気がついた。

イ 上級生に間違(まちが)えて声をかけてしまった「僕」に、タクジが話しかけてきた。

ウ 転倒して絵の具をひっくり返してしまったタクジは、しばらく立ち尽(つ)くした。

エ ロボットの日に駅前広場のイベントに行こうと誘うタクジに、「僕」は冷たい態度をとった。

[　　] → [　　] → [　　] → [　　]

(2) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア タクジは中学時代、飽(あ)きることなく作業ができるヒューマノイドロボットを開発したいと考えていた。

イ タクジと「僕」は、人間の「恥ずかしくなる」機能の話題をきっかけに、話をするようになった。

ウ 「僕」はタクジとの最後のやり取りを後悔(こうかい)しており、三十歳の六月十日に会う約束をずっと覚えていた。

エ 「僕」と再会したタクジは、中学時代の言葉どおり、決して転ぶことのないロボットを開発していた。

[　　]

(3) 次の①・②に対する伏線(ふくせん)となっている出来事をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

① プラットホームに設置されたディスプレイ広告に、カラフルな絵の具がはじける映像が繰(く)り返されていた。

② マイクを通して大きな声で名前を呼ばれた「僕」は、観客席にいる人たちの注目をあび、顔が真っ赤になった。

ア 恥ずかしさは失敗を繰り返さないための機能だというタクジに、失敗したときだけでなく、大勢の前で名前を呼ばれただけでも恥ずかしくなることを「僕」は指摘(してき)した。

イ 言い間違いをしてしまって同級生から笑われた「僕」はどうしていいかわからなくなったが、別の言い間違いをしたタクジは動揺していない様子だった。

ウ 美術の時間、タクジは絵の具を踏(ふ)み潰(つぶ)してしまい、チューブからは色とりどりの中身が飛び出した。

エ ロボットの日のイベントの会場では、大型ビジョンにキャッチボールをするロボットが映されていた。

① [　　]　② [　　]